

# 協議会ニュース 109号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 2006. 11



## シバナ

福江湾の東隣にある伊川津干潟には、シバナ・フクド・ハマサジ等々 県レベルで絶滅に瀕する塩性湿地植物が何種も自生していることを、今年知った。この干潟は大山を源流に持つ新堀川によって維持されている。

### ・支部だより

名古屋支部のカシナガ調査プロジェクト

### ・ホームページ紹介

### ・会員のページ

八丈・三宅島旅行記(その2)

9月18日海上の森を廻って

中国雲南省紀行

ツクサ2種

・自然セクション 100 鬼崎海岸

・自然観察会～

・事務局だより/編集部

堀田守……………P2

永田孝……………P4

竹内秀代……………P5

山口健……………P6

鳥山けい子……………P8

齋竹善行……………p9

中井三従美……………P10

近藤記巳子……………P11

……………P12

## 名古屋支部のカシナガ調査プロジェクトについて

名古屋支部 堀田 守

### はじめに

カシノナガキクイムシの被害は、1934年九州でナラの木が枯れる被害が確認されたのが国内における最初と言われています。以降1952年ナラの集団枯損が兵庫県で確認され、一時は収まっていた。1973年新潟県で発生、1980年後半以降日本海側の地域を中心に、ナラ類（主に、コナラ・ミズナラ）が集団的に枯れる被害が拡大してきました。さらに、1999年には本州太平洋側に位置する紀伊半島においても被害が報告され始め太平洋岸でも拡大傾向にあり国会でも問題となっています。現在の被害地域は、山形・福島・新潟・富山・石川・福井・滋賀・三重・和歌山・京都府・奈良・兵庫・島根・鳥取・岐阜・長野の県内に及び、被害はそれぞれの地域で増加拡大の傾向にあります。愛知県は2005年まで、被害報告もなく2006年名古屋市内で発生の被害報告により県レベルでの調査対応の動きを待っているところです。

### 名古屋支部の動き

名古屋支部（名古屋自然観察会）では、2005年に2006年度調査事業として「カシナガ調査プロジェクト」と銘打ち、6月より支部調査活動を開始しました。現在までの調査経緯を紹介します。2004年7月に開催された猪高緑地自然観察会において、胸高直径約35cmのアベマキの木2本が枯れているのが観察されました。当初は枯れた原因が知識もなく、なぜかわかりませんでした。翌年2005年9月【財】森林文化協会主催の自然観察会を猪高緑地で開催協力した時、全国から来られた参加者から、アベマキの枯れた原因は、カシノナガキクイムシの被害では？とヒントを頂き、切り倒した木よりカシナガの幼虫を捕獲したことがキッカケとなり調査を始めました。2005年猪高緑地での被害は、コナラ・アベマキ合計10本、明德公園でコナラ3本、瑞穂公園でスダジイ・ピンオークなど3本の被害を確認しました。2006年も猪高緑地で観察を続けていましたところ、6月時点において緑地全体でカシナガ穿孔被害が、4ヶ所で約40本。7月20日には、緑地内全体で約120本も観察され、異常な広がり、緑地の管理者である名古屋市緑政土木局・名東土木事務所、及び愛知県環境部に報告を行い、愛知県森林林業技術センター技師にカシナガ個体の標本を提出しました。現在、太平洋型？日本海型？を遺伝子レベルで飛行ルートの結果まちとなっていますが、愛知県環境部の対応は、初耳の話としてまだ被害としての危機感、予防措置など認識がなされていない様に感じられます。名古屋支部においては、2006年7月より調査協力体制を組み、名東自然観察会が主体となり、データ収集を行なっています。現在、本調査におけるデータとしてまとめをどの様に行うか？を名古屋自然観察会「カシノナガキクイムシ調査プロジェクト」内で検討をしており、観察指導員としての知識の習得・カシナガの生態・自然環境の保全のあり方・等々これからカシナガプロジェクト内でいろいろな勉強会・行政に対する提案等取り組み方をまとめていく予定です。本年は、名古屋市内の被害場所状況を把握する程度とし、支部調査活動として長期的な取り組みになると思います。

また、PR活動として、本年9月17日名古屋市環境局主催の「環境デー名古屋2006会場」ブースに於いて、名古屋地区の被害データまとめを、なごや市内地図にプロットしてカシナガのフラス・カシナガの標本・被害木の展示を行い来場頂いた方より、自然保護活動と今後の森作り・緑地帯保全に対する方向性等の参考意見など貴重なご意見も頂きました。

### 2006年9月30日現在の被害情報（名古屋自然観察会カシナガ調査プロジェクト調べ）

滝の水緑地（緑区）・名古屋城内（中区）・城山八幡宮（千種区）・海上の森（瀬戸市）・森林公園（尾張旭市）・東山植物園（千種区）・大高緑地（緑区）・牧の池緑地（名東区）・明德公園（名東区）・猪高緑地（名東区）・小幡緑地（守山区）・相生山緑地（天白区）・荒池緑地（天白区）・天白公園（天白区）・島田湿地（天白区）

## 対策について

猪高緑地では、本年 7 月に名東土木事務所と協働し、被害木の薫蒸処理・立木に薬品の打ち込み、駆除テストを行いました。これといった被害に対する防除方法の決め手がないのが実情と感じました。緑地全体の更新を視点として長期的に考えた時、穿孔された小径木の伐採は、当年 10 月～11 月に行うことにより来春の萌芽も期待でき、次世代に残す為の緑地作りという保全管理のためのカシナガ被害木伐採の提案も行っています。しかし、伐採予算もなく手をこまねているのが現状です。

## カシノナガキクイムシの知識

1. **被害の推移**～被害を受けやすい樹種は、コナラ・アベマキ・シラカシの順で、被害を受けた樹は、7 月下旬から始まり 8 月中旬に枯れが目立ち 9 月上旬までにほぼ枯れてしまいます。
2. **被害の原因**～ナラ類の枯死は体長 5mm のカシノナガキクイムシ（以下「カシナガ」と言う）という甲虫の仲間により樹幹内下部辺材に多量に持ち込まれたナラ菌で、通水阻害を起こし枯死すると言われています。
3. **ナラ枯れの特徴**～被害木は樹幹下部に集中してカシナガの穿入痕があり、根本に木屑が散乱しているのが特徴で、先端部から枯れ始めます。
4. **カシナガの生態とナラ枯損のメカニズム**～カシナガ新成虫は、枯死した木から 6 月下旬に羽化脱出し、オスが新たな対象となる生立木に穿入し、集合フェロモンを出して大量のカシナガを集めます。カシナガが孔道を掘るとき体表面に大量のナラ菌を付けており、これが繁殖して通水阻害が起こり先端から枯れ始めます。

## 今後の対応

調査活動データの公開により、行政に対し、協議会としての声を通る組織・NPO 団体によるいろいろな場所で行われている森の保全（将来構想）への助言、森づくりや、保全活動にこの調査活動が結び付けばと思います。

調査に関心ある会員の方は、下記調査表により名古屋支部の堀田宛情報のご提供をお願いします。

## カシノナガキクイムシ被害調査表 No. \_\_\_\_\_

調査者氏名					連絡先	( )
調査年月日	年	月	日	天候		
調査場所住所						
(公園名)						
被害樹木名	コナラ	アベマキ	シラカシ	アラカシ	スダジイ	その他
被害確認数	本	本	本	本	本	本
被害状況	木屑が出ている		枯れている		樹液が出ている	
周囲の状況						
胸高直径	1	cm	cm	cm	cm	cm
	2					

# 愛知県自然観察指導員連絡協議会の ホームページができました。一度ご覧下さい！

アドレスは <http://www.naichi.net> です。

シンボルマークは  
愛知県の木である  
ハナノキの葉を  
6支部にちなんで  
6枚組み合わせ  
ました。

会則等です。

協議会としての  
活動記録です。

各支部の  
ホームページへ  
のリンクです。

各支部の主な観察会  
会場を示しました。

一般の方や  
協議会未加入の  
指導員に対する  
お知らせです。



愛知県自然観察指導員連絡協議会のホームページですが、8月の理事会で内容を検討していた  
だき、公開の運びとなりました。内容的にはまだまだ未完成で、各支部のホームページへの見  
出しといった意味合いが強いものですが、今後は協議会としての事業の紹介や会員への情報発信と  
いった面から、内容を充実させて行きたいと思っています。

今後、掲載内容に関するご意見等がございましたら、ホームページからのメールやメーリング  
リストでお知らせいただくとありがたく思います。(ホームページ担当 永田 孝)

# 知多自然観察会有志の八丈・三宅旅行記（その2） 2005.12.24~28

知多支部 竹内秀代



土石流で埋まった鳥居

島には、「高濃度地区」という住んではいけないところがあり、風向きによっては危険地区に船が着く。

噴火以前はにぎやかな海水浴場であっただろうが、今はゴースタウンになっている。三宅島の自然観察指導員、成田さんに連絡がとってあったのでお願いして島内を効率よく案内していただく。黒い砂浜。火山灰の層にいち早く広がるヤシヤブシ。昭和の噴火で溶岩流に埋もれる中学校の校舎あと。島の経済に関わる森の話やこれから緑を戻すための植樹実験の様子を見せていただいた。もちろんビーチコーミングも欠かさない。



った。（においはきついがうまい！）

短い滞在に後ろ髪を引かれながら、前々日の海とはうってかわってこの季節には珍しいという静かな海と、三宅島の噴煙に送られ6時間。東京への帰路についた。“島はおもしろい！”“次はどこへ行こうかなあ”と、船内で盛り上がる、ますます元気な知多自然観察会のメンバーだった。

なお、旅行の詳細は「知多自然観察会」のHPに掲載しており、三宅島での交流の様子はNACS-J機関誌「自然保護 No.490号」にも取り上げられた。

（前号より続く）そして、翌々日に三宅島へ渡った。八丈島での3泊とも島内のさまざまな温泉につかって地元のおばちゃんとの話を楽しんだ。名物「しま寿司」（白身魚のづけネタにカラシを挟んだ寿司）「あしたばうどん・そば」もうまかった。

やっとのことで三宅への船に乗り、ゆられること4時間。島に近づくにつれ、イオウのにおいが漂う。噴煙の周りには白骨のような枯れ木と化した木々。

夜には島の指導員や、植樹を行う事業所の方たちとの交流会もあった。アカコッコには出会えなかったが、アカコッコ館やその近くにあるため池「大路池」周りの自然林を見て回った。歴史の中で度重なる噴火に負けずのこったスダジイの大木が印象に残った。レンタカー屋のおばちゃんが「三宅島には何にもないでしょう。」と、しきりにいっていた。「黒い砂もあるし、珍しい貝やおもしろいものがいっぱいありますよ。」と返事をする、不思議な顔をされた。土産にはもちろん本場「クサヤ」を買





## 9月18日海上の森を廻って

尾張支部 山口 健

2006年9月18日といえば、ふるさと親子自然観察会をはじめて海上の森で行う予定でしたが、残念ながら当日の天気予報は台風13号が本州に接近し、東海地方に秋雨前線が近づいて荒れ模様の予報が出ていたので、やむなくふるさと親子自然観察会中止の連絡を「尾張自然観察会」のwebページで流さざるをえませんでした。

それでも当日参加者が来た場合に備えるのが主催者の務めなので、集合場所の愛知環状鉄道山口駅前に時間どおりに行ってみたところ、いつも尾張の定例観察会に熱心に参加してくださる親子の方と前日の海上の森の定例観察会に参加してくださった方、このふるさと親子自然観察会の運営を手伝ってくださる予定だった大谷さんと辻さん、そしてなんと知多自然観察会会長の降幡さんもはるばる来てくださいました。降幡さんは海上の森ハンドブックで「きのこ」の執筆を担当するそうですが、この日はその関係で海上のきのこを調べに来られたようです。降幡さんは朝観察会が中止かどうかの電話をいただき、残念ながら中止の旨を伝えただけに当日来てくださって感激しました。

最初に見頃を迎えたシラタマホシクサの群落を観るために海上の森の近くのとある湿地に向かいました。満天の白い星のようなシラタマホシクサの群落はカスミソウ畑のようでいつ見ても見事です。前日の海上の森の定例観察会の終了後にもこの湿地に行ったのですが、この時同行した牧野さんが以前に比べてこの湿地のシラタマホシクサの数は少なくなったような感想を持っていました。

降幡さんも知多の方でもやはりシラタマホシクサは数を減らしているとおっしゃっていました。湿地の人の踏み入れや湿地周辺の森林の消失などによる湿地の乾燥化、湿地の水質汚染などによる環境の悪化、あるいは宅地造成などによって湿地そのものの消失のためにシラタマホシクサは近年県内でもかなり数を減らしています。

シラタマホシクサは生育している湿地だけでなく、湿地の水を涵養している周辺の森林の保全や植生遷移の抑制、地下水脈など湿地周辺の環境をネットワーク化して考えなければいけないので、その地域ごとのシラタマホシクサの生育環境を広域的にみることは大切なことだと感じました。



▲ シラタマホシクサ

この湿地の近くの民家の石垣にツルボの群落がありました。そういえばこのごろ田んぼの畦などで普通に見られたツルボの群落を見かける機会がめっきり少なくなりましたが、降幡さんはツルボの群落の維持と土手の草刈は密接に関係があることを言っていました。土手の草を刈り取ることにより、土手の養分が多くなるのを抑えられて、同時に丈の高い大型の雑草の生育も抑えられます。草丈の低いツルボは草刈の高い他の大型の雑草に負けてしまうことがあり、草刈によって大型の草本は刈り取られ、それによってツルボの群落は維持されてきたという事です。近ごろは水田や矢作川などの土手でもツルボは少なくなりましたが、草刈の時期、回数、除草剤の使用などが関係しているみたいです。

そういえば以前の研修会で、ここ数年街中でマツムシの声を聞く機会が多くなってきたという話がありましたが、これも土手の草刈の頻度が少なくなり、マツムシの産卵場所であるススキ群落が増えたことが関係している

のかなということを感じたりしました。地域の植物群落はその自然環境の条件だけでなく、草刈や徐伐などそれぞれの地域の人の関わりが密接にあるので、地元の人とのつながりや理解を含めて、協力して保全していく必要性を感じました。

その後、愛地球博開催時に開通していたゴンドラ跡地に移動しました。今のところその跡地にある池周辺は遷移が進んでいてある程度の種類のトンボ（ショウジョウトンボ、オオシオカラトンボ）は見られましたが、裸地に近い状態が多いので今後この植生がどのくらい回復するか見守りたいものです。

そしていよいよ海上の森へむかいました。キノコが多く見られる湿った環境がいいので、駐車場～四ツ沢～海上川沿い～集落～大正池～堰堤と行ったコースにしました。雲が多い中、少しだけ晴れ間が覗いて、木々の切れ間に覗く日差しに初秋の気配が暖かく感じられました。同時に本来の観察会が中止になってしまったのが少々恨めしかったです。しかし参加してくださった親子の方はサワガニやカナヘビやカマキリなどを捕まえて楽しんで、一応ふると親子自然観察会の目玉の生き物を手に取るという目的は達しました。

私個人的にはいつも大勢で慌しい観察会が続いたこのところ、久しぶりにこのような少人数で歩く海上の森の中で沢のせせらぎも森で流れる時間もゆったり感じられて、のんびり森の魅力を再確認しながらみんなと交流できたように思います。

雨の後のためか、キノコが多くでていました。

大谷さんもキノコや森の生き物の写真を存分に撮られていたように思います。

この日海上で見られたキノコのリストを後に降幡さんから送っていただきました。次のようです。

カレバキツネタケ、ヒナノヒガサ、アマタケ、オオホウライタケ、ドクツルタケ、ウスキモリノカサ、ソライロタケ、アカイボカサ

タケ、キイボカサタケ、コンイロイッポンシメジ、コウジタケ、アシナガイグチ、ベニイグチ、ノオイコベニタケ、クジラタケ、エゴノキタケ、ホコリタケ、ノウタケ。

今挙げられたキノコは図鑑などにも掲載されていない名前も結構多く、改めてキノコは難しいと思いましたが、色も赤、青、紫、白、黄など様々な色もあり、形も傘状のもの、瓦状のもの、ジェリー状のものなど変化に富んで、名前を知らなくてもなぜこんなに様々な色や形があるのか、思い巡らしてみるのがいいものです。なによりキノコが森の分解者として朽木などの有機物を土に還すといった重要な役割を知ったとき、森にキノコがたくさんあることは森で循環がうまくできているに違いないと実感できます。

それから稲穂が実りかけた集落に向かい、サテライトでしばしば休憩して憩いのひとときを過ごし、水にあふれた大正池に行きました。午後の穏やかな空気に包まれた池のたたずまいは秋霞の中に浮かぶ朽ち木までが優しい表情で出迎えてくれます。何組ものアオイトトンボのカップルのタンデムや帽子等に止まりたがる人懐っこいマユタエアカネが見られ心むものがありました。

そして大正池堰堤を下って、堰堤から滴る滝の水とその流れを眺めながら帰路に着きました。

他支部の人や日ごろ観察会や尾張支部でお世話になった人と気兼ねなく海上の森を歩くことができ、それぞれの海上の森に対する思いを感じたようでよかったと思います。

来たる11月25、26日に尾張支部と知多支部と支部交流会を控え、またハンドブック作成を協力執筆という形で海上の森に関わっていきますが、このような支部を超えた活動がそれぞれの地域の自然を守るために智慧を出しあい、地域の自然保護の大きな原動力になることを願っています。

# 中国雲南省紀行

東三河支部 鳥山 けい子

## ～雲南の「食・住」について～

8月4～11日の8日間、「中国雲南省の植物と自然観察、世界遺産高黎貢山と騰冲・瑞麗の旅」へ行ってきた。ここでは今回の旅の「食・住」を紹介する。一行18名は中部空港から広州―昆明―保山―六庫へ、高黎貢山の風雪大Y口高度3100mから北へ福貢、南へ下り騰冲、ビルマ国境付近の瑞麗までの旅だった。

車はディーゼルで、途中給油所に3,4箇所立ち寄ったが軽油がなく、やむをえず運転手は自宅に電話して運んでもらうような状態。新聞報道等で知っていたが、原油高や供給不足が中国雲南省まで影響があったのを肌で感じた。値段は日本より少し高いように思った。途中、検問が非常に厳しくパスポートの提示を求められ一時間程足止めされた。「引き返すしかないか」と一瞬頭をよぎった。中国人添乗員の彼女は緊張して非常に疲れたと思う。一生懸命に働いてくれた。(日本人でここに足を踏み入れた人はいないらしい)

世界遺産高黎貢山の風雪大Y口の途中にある山あいの飯屋の昼食はホウロウの器のスープで中に黒いトサカのついた頭と、足2本がでてきた。さすがに爪は切り落としてあったが、驚いた。味はなかなかのもので美味しかった。味付けご飯はカボチャとじゃがいもやハムが入っており、圧力釜でいたものでおこげもあり美味しかった。8日間を通し口にあうものばかりではあったが、このご飯が一番美味しかったように思う。家人は実直そうな夫婦と息子で切盛りしていた。ご飯の炊き方、燻製ハム2本が嫁入り道具であることなどと話したり、とても一生懸命心をこめて作ってくれたのが感じとれた。

途中、山の上で暮らすトアン(徳昂)族の村を訪れた。



▲ 籠に「騰冲特産 松花糕」の文字

ここはお茶を栽培し、竹を組んだ家に住んでいる。お茶の樹の原産地は中国雲南省を源としアジア照葉樹林帯に広がり、世界各地に伝わったと聞いている。茶畑は多くあったが、手を入れず自然のままのようで、日本の茶畑とは違っていた。

南に下り騰冲では北海湿原入口の駐車場で特産の松花糕が2個一元(2個15円)で売っていた。マツの花粉に甘味を加えた珍しいお菓子である。

騰冲の泊まりは雲南省：広州、昆明、麗江にもある「官房集団」の経営する5ツ星のホテル。騰冲は熱海地熱地帯で温泉が湧き出ている。SPAがあり中のシステムは充実していて女性達にはうれしい場所だった。2007年飛行場開港予定で建設中であるとも聞いた。

食事に味噌や浜納豆がでてきたが日本のものと同じであり、また偶然道で出遭った人達、レストランで働く彼女達、それぞれ皆一生懸命働いていた。私達のルーツはこの雲南にあったのではないかと考えた。

土産として玫瑰花(バラ科のハマナスの花を自然乾燥させたもの)と三七花茶でできた壁飾りを買って求めた。

※ 今回の植物観察については、天野保幸さん(東三河支部)のホームページをご覧ください。

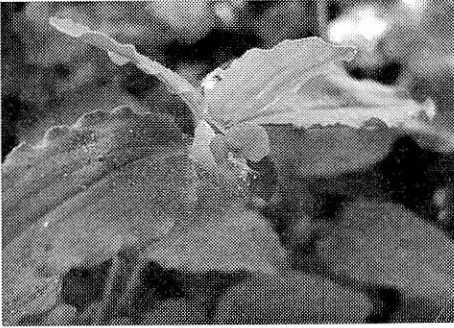
<http://www.sala.or.jp/~yasuyuki/katatsumuri.html>  
(注：11月頃にアップの予定)



## ツユクサ2種—マルバツユクサ & シマツユクサ

尾張支部 齋竹 善行

ツユクサの花の時期は過ぎてしまいましたが、自然観察メーリングリスト（ML）で愛知県内での分布が話題となったマルバツユクサとシマツユクサについて紹介します。



### ●マルバツユクサ

ツユクサによく似ていますが、その名のように葉は幅が広く丸味を帯び、花はツユクサよりずっと小さいので、花を見れば容易に識別できます。

アジア、アフリカに分布する植物で、わが国では本州の関東以西、四国、九州に分布し、本来の在来種としては、海岸近くに生育するとされているようですが、近年日本の暖地で多数見られるようになったそうです。増えた要因は、輸入された肥料に混じった種子からと考えられ、帰化で広がったという説が有力です。

愛知県内の分布について、東三河支部の牧野紀子さんが調べて紹介しておられますが、東海市、幡豆町、額田町、幸田町に分布の記録、一宮町、豊川市、小坂井町、音羽町、御津町、蒲郡市、豊橋市、田原町、赤羽根町、渥美町に多くあるとのことです（市町村合併前の名称で表示）。

知多支部の吉川洋行さんから知多半島で分布を広げており、東海市役所周辺で密度が高いとの紹介がされ、尾張旭市在住の尾張支部の平松節子さんの自宅の庭にも数年前から毎年生えてきているとのことです。

普通のツユクサと違って、地下に閉鎖花をたくさんつけるので、気づかないうちに種が土とともに運ばれ、思わぬところで生えてくることがあるようで、注意してみると身近に見られる可能性もあります。

### ●シマツユクサ

こちらもツユクサによく似ていますが、茎は地を這い、葉はツユクサより細く、花はツユクサよりずっと小さくマルバツユクサと同じくらいの大きさで、内花被が3片とも青色（ツユクサは内花被3片のうち下の小型の1片は無色）である点が異なります。

発端は岩倉市や江南市で小さな花のツユクサが見られるとMLに書き込んだところ、尾張支部の山口健さんが現物を見てシマツユクサではないかと鑑定され半明したものです。

しかし、MLでホウライツユクサも分布を広げているとの吉川さんの指摘もありましたので、図鑑で調べると、ホウライツユクサはマルバツユクサやシマツユクサに似ているが、蒴果に2ないし3個の種子があるのに対し、シマツユクサでは蒴果は3室に分かれ5個の種子を有する点で異なるとのことで、蒴果をばらしてみるとシマツユクサの特徴を確認できました。

シマツユクサは世界的には広く分布し、国内では九州南部や沖縄に分布すると図鑑に記されています（ちなみに、ホウライツユクサも九州南部、屋久島、



沖縄、台湾、東南アジア、オーストラリアなどに分布しているとのこと）。ネットで調べると、徳島県や愛知県内では豊橋市で見つかったとの紹介がされています。岩倉市内においては農地周辺ではほぼ全域でツユクサと混生して見られ、隣接する小牧市、一宮市、江南市でも生育していることが確認されました。

他所では種糞に混じって分布を広げたとの報告もあるようですが、尾張部にどのようにして入ってきたかはわかりません。比較的広い範囲に分布している状況からみて、この地域にシマツユクサが入ってきて何年か経過しているものと考えられます。

毎日、通勤で歩いている道端に生えていても、地味な植物だと気づかないものですね。

外来種も増えているようすし、植物の分布を時間を追って調べていくことも重要かと思います。

## 鬼崎海岸

知多支部 中井三従美

所在地 常滑市新田町

鬼崎海岸は常滑市の北部に位置し、伊勢湾に面している約 4.5 km の砂れき浜の海岸である。北部から西の口、蒲池、榎戸、多屋の各地域を合わせて鬼崎地区と呼ぶ。その昔、榎戸沖は潮の流れが速く、多くの船が沈んだことから、鬼が住んでいると言われ「鬼ヶ崎」とこの名が付いたが、現在は地名としての鬼崎はなく、2 つある漁港と小中学校にこの名が残っているだけである。

### ◆西の口海岸

この海岸は津波対策のため、堤をかさ上げし、波返しを階段状に築く工事がされたため、以前に生育していた海浜植物はほとんど消滅し、砂浜も無くなった。

ただ、ブロックの間から、オカヒジキ、ツルナがわずかに生育している。

### ◆蒲池海岸

この海岸も同様の津波対策が行われているが、波返しが反対側にあり、堤の外側には 50m 程の砂浜が広がっている。

この浜は 1995 年と 2005 年にウミガメの産卵が確認されたことから、地域の小学生が見守ってきた浜である。砂の芸術の授業などや地引き網なども行われて、地域と結びついた海岸である。

春になるとコウボウムギに始まり、ハマダイコン、ハマボウフウ、コウボウシバ、ハマヒルガオ、スナビキソウ、ハマゴウ、マルバアサガオ、オカヒジキ、ケカモノハシなど、浜はにぎやかになる。



スナビキソウの群落

特に県下では唯一のスナビキソウ自生地、毎年個体数が増えつつある。春に北へ渡るアサギマダラが、この花に吸蜜に来る。早朝多く見かけることがあり、今年(2006 年)も 2 頭にマーキングをした。

この浜の特徴は生育している海浜植物の多さである。中でもハマボウフウは特に多く、県内最大級の群落であろう。



▲ ハマボウフウ

冬になると北西の風に乗って、飛砂が人家まで吹き上がって来る。植物だけでは飛砂防止には限界があり、冬期のみ防砂ネットを張っているが、洗濯物や机の上にまでも細かい砂が来て、近隣の住民には甚だ迷惑な状況がある。

### ◆榎戸海岸

蒲池同様の飛砂もあるが、クロマツの防風林の存在が防風・防砂に働いていると思われる。砂浜は 30~40m 程あり、ハマゴウの群落がある。ネコノシタ、ビロードテンツキ、ケカモノハシ、ハマヒルガオ、ハマボウフウなどが多く見られる。

### ◆多屋海岸

通称、海泉(かいせん)と言う。4 地域のうちで護岸堤防から汀線までが一番広く、80m 程の所もある。他の海岸に比べて砂の粒子が粗く、草本群落が単一化している。この浜はハマヒルガオが多く、花期にはピンク一色になる。オニシバ、ハマゴウも多く生育している。

この海岸もウミガメの産卵があり、地域の人々に見守られている。堤防下すぐの砂浜に陶管で花壇を作り、ソテツ、トベラなどを植栽したことで、車の進入や火気の使用がなくなった。

# 自然観察会

～ スタッフになろう！  
& 伝え方のヒント ～

名古屋支部 近藤 記巳子

## ■ スタッフになろう

～リスク管理について～



リスク管理について戒をこめ、苦い経験を書きとめます。

ここ何年か名古屋大学の学生を受け入れています。昨年のフィールドワークがよいよ終了間近になり、学生たちに「これから先、小石が多い坂道なので足元に充分気をつけて」と注意を促しました。しばらくして先頭に行く私の耳に、後方から会話をしている学生の声が聞こえてきました。話に熱中するあまり足元から注意がそれないように・・・と祈りながら下っていると、突然悲鳴です。例の話に興じていた学生が、下肢を押さえながら横たわっています。

すぐ大学の先生が学校と連絡をとり、学校側が直近の病院に連絡。病院で受診した結果、学生は、骨折で入院となりました。(学校側の保険にて対応)

それにしても、学生たちに「足元注意」の声を、再度かけなかったことが悔やまれます。安全確保のためには、何度でも声かけが必要なことを身をもって経験しました。

これまで15年、相生山緑地でもまた他のフィールドでも何事もなかったことは本当にラッキーだったのですが、その安全はたまたま偶然だったことを思い知った出来事でした。

最後に植物などの誤飲・誤食は保険の対象外です。意外に認識が希薄のようですから、くれぐれも注意ください。

## ■ 伝え方のヒント

～自然を守ること～

観察会の最後のあいさつは、どのようにされているでしょう。体験を通して自然のすばらしさを理解できても「よかった、よかった、おしまい」ではないはず。次のステップは、「自然を守る」ことです。では何を、どうすればいいのでしょうか。

私は、誰もが日々の生活で自然が守ることが可能なことを伝えます。「例えば、買い物をしたときにレジ袋を断ることもそのひとつです。その他にも、まだまだあるでしょうから、家族や友達と一緒に考えてみてくださいね」と、数年前からこのような話で締めくくっています。私たちが主催するもののみならず、学校・行政などが主催するものでも同様です。当初、奇異に思う指導員仲間もいたようですが、今の時流を見れば理解できるでしょう。環境は、一人一人の心がけ、そして行動の積み重ねで変化するのですから。

さて最近、各行政からのアンケートに、団体のイベント・研修内容など並んで、循環型社会活動を問うものがあります。当会の活動としては、みなさんに送付する「協議会ニュース」の送付、理事への連絡のReuse(リユース)封筒がそれにあたります。発送担当者及び会員の理解と協力があって成り立つ取り組みです。今後もしろしくお願いいたします。

最後にもうひとつ。知人の学芸員は、「僕のコピーをたくさん誕生させることが自分の役目」といいます。私も「近藤さんみたいに自然観察指導員になりたい!」といってくれる小中学生たちに会おうと、思わず頬がゆるみます。将来を託す子どもたちに、真剣に向いあって自然のことを伝えたいと思っています。

◆「自然観察・・・」に、1年間おつきあいいただき、ありがとうございました。「うなずきながら読める」という共感の声を、連載中に聞きほったものです。活動をためらっていた方が、「自然観察会にでてみよう」という気持ちになっていただければ幸いです。何分にも締め切り間際に思いつくまま書き連ねた原稿のため、未整理の部分が少々ありましたことをお詫びいたします。

# お知らせ

## ■ 会員について

<転居>

平井直人（尾張支部）

〒452-0822

名古屋市西区中小田井三丁目 358-1

052-504-5223

## ■ 会員の状況報告（中間まとめ）

<2006.10.25 現在>

支 部	会 費 納入者	前 回 名 簿 掲載者	増 減
名古屋	93	100	-7
尾張	82	84	-2
知多	53	54	-1
西三河	47	49	-2
東三河	60	62	-2
奥三河	13	14	-1
未所属	4	4	0
総 計	352	367	-15

注

- 1) 複数支部所属の会員は協議会費を納入した支部に計上
- 2) 会費納入者は 10 月 25 日までに報告のあった数
- 3) 前回名簿は 2006 年 2 月 25 日時点  
(以上、名簿管理担当：齋竹)

表紙「シバナ」

写真・文 大羽康利

編集スタッフ

岩沙 雅代、近藤 記巳子、齋竹 善行、  
永田 孝、古川 俊江、牧野 靖子、  
横井 邦子、吉田 孝三

## ■ 原稿募集中！！

～編集部からのお知らせ～



◎104 号から 109 号まで表紙の写真とその解説をしてくださった大羽康利さん（東三河支部）、ありがとうございました。次号から表紙を渡辺敦さん（名古屋支部）が担当されます。

◎104 号から 109 号まで「自然観察会～スタッフになろう！ & 伝え方のヒント」を連載してくださった近藤記巳子さん（名古屋支部）、ごころうさまでした。次号から 1 年間（6 回分）連載してくださる方を募集しています。

◎協議会ニュースには、各支部の取組を紹介する「支部だより」、愛知県内の自然観察適地を紹介する「豊かな自然セレクション 100」、会員からの観察会報告、調査研究レポート、自然環境保全に関する意見などを紹介する「会員のページ」が設けてあります。

◎原稿は下記編集部まで郵送するか、Eメールで [BZA03620@nifty.ne.jp](mailto:BZA03620@nifty.ne.jp) まで送信してください。なお、内容を変えない程度に加筆・修正することがあります。また、紙面の都合で掲載時期が遅れることがあります。

あらかじめ、ご了承ください。

◎みなさんの積極的な投稿を、お願いします。（以上、編集スタッフ：齋竹）

協議会ニュース編集部

〒470-2401

美浜町布土明山 299-2

永田 孝

愛知県自然観察指導員連絡協議会 事務局

〒457-0006 愛知県名古屋市南区鳥栖 2-6-17 桜本町 CH101

近藤 記巳子 Tel/Fax 052-822-7460